

# 1. ITによる腹部画像診断の最新動向と未来への展望

## 3) 医療におけるデジタルトランスフォーメーションの現状と将来展望

桐山 瑤子 (株)MICIN

「医療DXは遅れている」と耳にすることが多い。2018年ごろから日本でもしばしば聞かれるようになった“DX”という言葉の使用は、コロナ禍で一気に加速し、今や猫も杓子もDXと叫ばれる世の中であるし、医療においてもそれは例外ではない。

医療DXとはなんなのだろうか。白状すると、筆者にとってもつかみがたい用語である。

### DXとは？

そもそも医療DX以前に、DXという用語自体、認識にズレがあることが少なくない。DXがdigital transformationの略語であることはいまさらである（これも言うまでもないが、決してダウタウンとかマツコのデラックスではない）が、ちまたにあふれるDXに関する記事やサービス紹介などをいろいろと読んでみると、technologyとtransformationの区別がついていないものが散見される。technologyによって生み出されるのが新たな個々の製品やサービスであるのに対して、transformationとは“状態が変化していくこと”そのものを指す言葉である。

あるいは、digitization, digitalization, DXについての区別がされていないものも散見される。この3つの用語はいずれも“デジタル化”と訳されるが、似て非なるものだ。digitizationはアナログからデジタルへ変換する技術的過程であり、digitalizationはdigitizationによりデジタル化された情報を基に、業務をICT化していく業務的過程である。そし

て、DXは、2004年にストルターマン教授（スウェーデン・ウメオ大学）が提唱した概念であり、「ITの浸透が、人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させる」というそれを基にさまざまな定義がなされる用語である。つまり、DXとは、digitizationやdigitalizationを活用しながら社会や人々の共有価値に変革をもたらしていくこと、とでも表現すればよいだろうか（図1）。

例として“会議”というものを挙げてみると、Web会議システムはdigital technologyであり、従来、対面で行っていた会議をWeb会議システムを用いて行うことがdigitization、Web会議システムを含めて会議における一連のワークフローそのものを効率化することがdigitalizationである。一方、Web会議システムが社会実装されることでリモートワークが社会に浸透し、通勤や取引先訪問から解放され、生産性を維持・向上しながらもそれぞれの人々が自分の時間をより大切に、人生を豊かに過ごす社会を構築することがDX、ということになるのだろう。

もう少し具体的にDXを定義している場合もある。例えば、経済産業省が平成30（2018）年12月に公開した「デジタルトランスフォーメーションを推進するためのガイドライン」<sup>1)</sup>によると、DXは「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」と定義されている。

これを踏まえると、医療におけるDXがなかなか進まない理由はさまざまあるのだろうが、医療が国民皆保険制度の下で、すでにある程度確立されたシステムが実装されているわが国においては、ビジネスのように競争優位性を確立することが主の目的とはなり難いということもその一因なのかもしれない。

医療において競争優位性よりも重要となるのは、いかに公平に、そして効果的・効率的に、国民に提供し続けられるかということにあると考えられる。そうすると、医療DXとは、「データやデジ

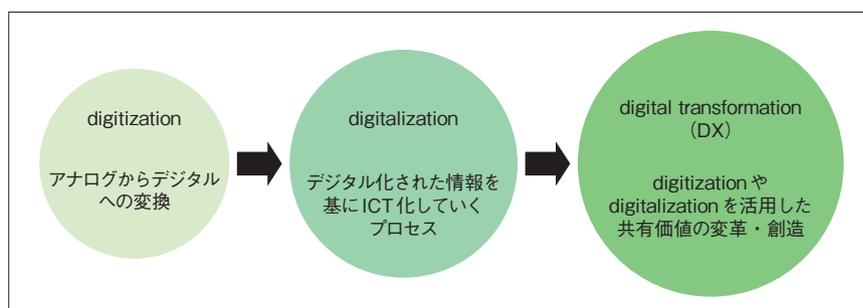


図1 Digitization, digitalization, DXのイメージ